

## 1. はじめに

私は京都大学の法学研究科で政治思想史を専攻しています。普段はフランス現代思想などを中心テーマとして取り扱っており、イランからは遠い分野といえるでしょう。それでも本研修に参加しようと考えたのは、まさにその「遠さ」、すなわち自身の無理解を少しでも克服することが、今後の人生や、ゆくゆくは社会のために、有意義になると考えたためです。本報告書では、見聞きした事実の紹介と解釈を交えつつ、その概要を書き残すことを目的とします。

## 2. SIR 学生訪日研修

2025年12月2日から6日にかけて、SIRの学生は東京を訪問し、私たちも同行過程でたくさんのお話を聞くことができました。正直なところ、イランの印象は権威主義国家であり、イスラム教圏に通底するうっすらとした女性の生きにくさ（直前の9月に真夏のイランを訪問し、スカーフの暑さに辟易とした記憶が鮮烈に残っています）もあり、「実際のところ人々は何を考えているのだろうか」、「“リベラル”な価値観で話をすると怒らせてしまったりするのだろうか」という不安を抱えながらの参加となりました。もちろん、そのような要素がなかったとは言えず、とりわけ財団内でのプレゼンテーションでは「国家エリート」の視点が語られているな、と感じることもしばしばでした。印象的だったのは、学生のひとりに「きみは高市早苗をどう評価するか」と問われた際、「初対面でそれ聞いていいんだ...」と思いつつ自分の考えを告げた上で、「とはいえ（台湾有事発言の直後だったため）戦争を誘発するような発言で国民を不安がらせるのは戦略上賢明とは思えない」と言ったところ、「国家の長である以上強硬姿勢をとらなくてはならない。戦争がはじまれば日本には米軍がいるんだから、正当に中国を叩くいい機会になるだろう。」という旨の返答があり、「戦争」がつねに身近にあり、しかも「聖戦」であった社会の考えに触れた気がしました。これは一見、欧米・日本の「野蛮な」イランイメージを補強するものでありましたが、私にとってはむしろ、相手の思考枠組みを理解するうえで極めて有益かつ安心感を伴うものでした。相手が未知にとどまっているうちは接近のしようがありませんが、異なる枠組みがあることを共有しさえすれば、没交渉は免れる可能性があるだろうと感じたためです。その学生とは、神についてなど、私がタブーかもしれないと気を遣っていた話題を多く共有することができました。またイランの学生たちが終始礼儀正しく、場合によっては儀礼的であったにもかかわらず、食事に関しては「口に合わない」と断言していた点も、面白く感じました。

## 3. オマーン・カタール

イランのデモ勃発の最中には、いつ渡航警戒レベルが変動するのか、イランの実情はどうなっているのか終始気になっており、インターネットがブロックされるまでは「研修渡航が実現すれば、在テヘランのNHKやJICAからどれほど貴重な話を聞けるのだろうか」と思いを巡らせていました。結果的にイランへは渡航できませんでしたが、とくにアルジャジーラ・フォーラムをとおしてアラブ諸国におけるイランという、日本では獲得し得ない視座に触れることができたことは、大変貴重だったと考えます。字数の制約上手短ではございますが、改めまして、代替研修の企画・遂行にご尽力くださった担当のお二方をはじめ、関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

・オマーン (2026.02.01-03)

岩がちな地形と建造物の融合が美しい国でした。特に飲食店でザンジバル料理を見つけた時には、オマーン帝国の名残を感じることができて興奮しました。オマーンにおいて興味深かった点は、やはりスルタン・カブースのプレゼンスの大きさです。カブース前国王が設立したスルタン・カブース大学においても、人々は口々にスルタンを讃え、渡航中に連絡をとっていた SIR の学生も「彼が即位する前のオマーンは全く発展しておらず不安定だったので、彼が一人で築き上げたようなもの」と称していました。男女別の廊下や入り口が印象的でしたが、来訪者に対しては例外を採用する寛容さが見受けられ、男性の教員と見られる方が握手を求めてきたことも驚きました。仲介外交をモットーに掲げる国家としての柔軟性を垣間見たように思います。同様に、学校内にはもちろんスルタンの肖像が掲げられ、教授室の扉に旗が貼られているのも目にしましたが、ナショナリズムとパトリオティズムをともに戦時下の「愛国主義」に留め置き捨て去ってきた日本の言葉では語りにくい誇りのようなものを感じました。オマーンの石油博物館では、オマーンの地層や、南北の油質の差、それらに応じた技術の使い分けが仔細に紹介されていたほか、さまざまな体験機械が設置されており、オイルマネーの強さと教育に対する熱意を感じることができました。山九株式会社さんが紹介されていた企業労働者の Omanisation などにも、自国民に対して大きな政府として能動的に介入していく国家像が現れていたと考えます。

#### ・カタル (2026.02.04-06)

カタルでは、半日のフリータイムがあったため市内を散策し、ワールドカップに向けた開発の痕跡らしきものを多くみることができました。海岸沿いの目抜き通りには、海側を向いた大量の客席が残っていたり、横断歩道がない・あるいは封鎖されていたりと、日常的な使用というよりイベントを重視した設計を感じました (2036年のオリンピック招致に向けても動いているようですが、実現すればこれらが活用されるのだらうと思います)。また、おそらくさらに伸ばす予定だった街路が立ち退きのまま残っている一帯、さらに少し離れると下水管が露出している道などが見えていたことから、ドーハ中心部や Education city といったスポット開発が行われ、車での移動が前提されていることを伺うことができました。

#### 4. アルジャジーラ・フォーラム

アルジャジーラ・フォーラムでは、パレスチナ問題を軸として、アラブ諸国とアメリカの関係、そして地域全体の安全保障について議論が交わされました。特に印象に残ったのは、Day 1 session 2 における Trump's Peace Plan で繰り返し主張された Disarmament and Resistance (非武装化と抵抗)、Internationalisation (“国際化”) の議論です。

本フォーラムの興味深いところは、登壇者たちが総じて「平和」てきなものをもとめていながら、その言葉自体や手段について多様な考えをもっていたことです。とりわけパレスチナ (典型的にはハマス) の非武装化については、ピース・プランはイスラエルの隠れ蓑に堕していると批判するものから、やはり武装する限り停戦は実現しないだろうとする主張まで展開され、非武装をもって平和主義を掲げる日本という国の学生としても実に興味深いものでした。一方で、イスラエルが占領を行なっているのだから、抵抗は必然であり、その根源まで遡及していかななくては非武装を語ることもできないということ、その意味においてイスラエルは、いまだパレスチナの抵抗意思を削ぎ切っていないのだから常に敗北し続けているのだ、という主張は、大量虐殺<sup>ジェノサイド</sup>という言葉を用いながら“一般的”な「戦争」の言葉で両国間の関係を語ろうとする第三国に対する非難として聞かれるべきだと考えました。同様に、第三国、典型的にはアメリカが統治を行おうとする姿勢についても、この問題が破綻国家に対する介入かのように論じられていること、そもそも「介入」を、主権国家体制を守るべく設立された UN のものはや使命かのように語るこ

とに対しては、総じて疑義が呈されていました。抵抗とは self-determination（自己決定）への希求であり、代理統治のようなものは問題の本質を見逃しているということでしょう。

ところで、当初は「イラン研修」であった本プログラム参加者として注目すべきは、やはりアルジャジーラ・フォーラムが Arab countries という名称を採用したことです。Day2 session 2 で（把握できた限りでは）はじめて主題となったイランとアラブ諸国との関係は、そのアンビバレンスを示しています。イランはその歴史的関係性や昨今の対米関係において、日本でも報道の多い「お尋ね者」的ポジションを占めており、これはトランプの介入を批判しつつもその修正を通して役立てようとするアラブ諸国とは相いれないところがあります。しかし、フォーラムのオープニングにはイランのアラグチ外相が招かれ、アメリカ・イスラエルがもとめる非武装とは平和への呼びかけではなく「強制」にすぎないと、パレスチナ情勢とイランの制裁をパラレルに語るようなスピーチがされました。

これはのちのジョージタウン大学カタール校、Mehran Kamrava 教授の補足説明を受けてより理解が深まった点ですが、本セッションにおいてイランーアラブ関係の問い直しが俎上にあげられたのは、まさに第三者としての米国の欺瞞に関心が向けられるなか、強硬姿勢をとるイランの「宗教性」と言説としての妥当性の解釈をめぐる、あらたな視点が提示されつつある（あるいは、それが余儀なくされている）と捉えることができるのではないのでしょうか。歴史的確執を含め容易には踏み込み難いテーマではありますが、仮にも正義や平和を問題にする学問を志す学生として、そして「他者とは仲良くしていきたい」というきわめて初歩的な倫理を信じる人間として、フォーラムで提起された問題には向き合っていく必要があると考えました。最後に、フォーラムを通してもっとも嬉しかったことは、「平和やオルタナティブを語るのは結構だが、それをどう実現するのか言え」という会場からの質問が提起された際、登壇者の一人が「もちろん重要な点だが、実現することが全て偉いならば、我々はやはりリアリズムを認めることになる（意訳）」と述べたことです。理論研究者が抱えるジレンマに対して、一つの可能性を提示する応答であると感じました。

## 5. 「社会への還元」

社会への還元という意味において、アルジャジーラを案内してくださった重信メイさんの発言は印象に残っています。ジャーナリストが危険地に赴き「真実」を発信するのは、現地で真実が報道されることを求める、苦しみさらされた人々がいるためだ、というものです。湾岸地域は日本の「社会」ではないし、中東情勢を知って何になるんだと言われてしまえば返答に窮するところがあります。だからといって、「日本は中東諸国から石油・天然ガスを輸入しているし日本車の一大マーケットでもある」という返事はあまりに陳腐で、直感に反します。ですが、私たちが「人間社会」や「政治」、さらには「世界」という言葉を素朴に信頼できるのは、自分と同じような存在が共に生きていることを暗に信じているからといえるでしょう。その信頼を維持するには、「世界」でこれが真実であり続けることが不可欠であるし、そのためには具体的な他者、とりわけその崩壊に警鐘を鳴らす人々に目を向けなくてはなりません。だからこそ、私は理論研究を続ける傍ら、自身が見聞きした中東諸国の現状や人々について語ることで、この世界の偏見や無理解を少しずつでも減らしていくこと、また、不正義に対して声を上げることでできる人間を一人でも多くしていくことが、人間社会という共同幻想を信じ続けるための人々への還元であると考えます。私は誰かの苦しみを拾い上げるようなことをしたわけではありませんが、今回の研修は、言葉の力を信じる人間がこれほど多くいること、やはり実際に訪れて語ってみなければ、なにひとつわからないということを実感するうえできわめて有意義な経験でした。次回湾岸諸国を訪れるまでには、基礎的なアラビア語を習得してから行きたいと思います。